

ご挨拶

YNU 経済学部教育後援会

会長 宇佐見貞彦



YNU経済学部教育後援会会員の皆様、日頃より当後援会活動にご理解・ご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、当後援会では、昨年、就職や留学などYNUのキャリア教育の一端を会員の皆様に紹介するリーフレットを作成しました。

自宅を離れて生活している学生が多い中、保護者の皆様にも一大関心事であるYNUの就職活動を含むキャリア教育の実態について情報提供を行うことにより、少しでも会員の皆様の不安解消になればよいと考えたものです。文字ばかりでしたが、幸いに好評をいただき、本年度も改訂・発行させていただくことといたしました。

さて、改訂版のリーフレットでは、キャリア支援部の取組み、卒業生で構成する「富丘会」のキャリアアドバイザーからのメッセージ、在学生によるインターシップ体験報告など、YNUの特徴ある取組みについてご寄稿いただき、会員の皆様に有用な内容ではないかと存じます。

経済学部教育後援会といたしましては、今後も会員の皆様のご要望に応えることをモットーに活動を進めて参ります。引き続きご支援いただけますよう、お願い申し上げます。

特別理事（経済学部長） 富浦英一

保護者の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび経済学部では保護者の皆様向けに本学そして経済学部で行っているキャリア教育の一端をご紹介するリーフレットを作成いたしました。保護者の皆様は経済学部生の留学や就職に特に関心をお持ちのことと思います。おかげさまでYNU経済学部教育後援会のご支援をいただき、海外提携大学への短期派遣留学や経済学部独自の欧州およびアジア英語討論会で着実な成果をあげております。就職活動を含めたキャリア教育につきましては、本学ではキャリア支援部を中心としてさまざまなキャリアデザイン指導や個別相談を行い、さらに年間を通じて多くの企業説明会や就職セミナーなどを開催しています。そして経済学部では、卒業生が構成する富丘会が「富丘会メッセージ」として各界の第一線で活躍されている講師の方々を招いて講義を行う授業を提供し、またキャリアアドバイザーとして就職相談室で面談等を行ってくださっています。

このリーフレットにはキャリア支援部専任教員の居郷至伸先生と富丘会の小坂隆昭キャリアアドバイザーから寄稿いただきました。その他の記事と合わせ、保護者の皆様への経済学部そしてYNU経済学部教育後援会からのささやかなメッセージとなれば幸いです。



（富丘会小坂様（左）北澤様（中）と富浦学部長（右））

「就職活動について」



キャリアアドバイザーの小坂隆昭です。（昭和46年卒）

彼此10年近く、就職相談室で数多くの学生さんと面談を重ねて参りました。この間を振り返り、感じていることをお伝え致します。

相談室では、将来のこと、希望業界、体験談、今為すべきこと等をテーマに話をします。長くて5分話せば、内定が取れる学生かどうか判ります。もっと大袈裟に言えば、顔つき・態度で、どの業界の雰囲気があると解するような気もします。

内定を取れる学生は、二つの良いものを持っています。一つは軸があること。（哲学を持っている。信念の芽生えが感じられる）もう一つは、自分の考えていることを相手に伝える能力があるということです。（いわゆるコミュニケーション力）

別の観点からみると、自分の「立ち位置」に気付いているか、いなかのの違いです。大学入学までは、学生の優劣は、正解率の高低で決められます。多くの学生を教育する為には、正解（手本・見本）がある方が都合が良いからです。しかしながら、現実の社会には正解というものがありません。（唯一あるとすれば、自分の信じた道を行くことだけ）正解のない社会に船出しようとしている自分に気付くかどうか。正解至上主義に洗脳され過ぎた学生は、内定が取れません。彼らはすぐ口走ります。「正解は何ですか」「どのボタンを押せば内定のランプが点くのですか」

それでは、「軸とコミュニケーション力」を身に付けるにはどうすれば良いのでしょうか。やはり、一番良いのは、ゼミナールです。国大のゼミは、10人限度と少人数です。このアカデミックな場で、担当教授と多岐に亘り、徹底議論することです。インターンシップで社会を垣間見るべきです。ダブルスクールで刺激を受けることです。ボランティア活動で自分を見つめ直すことです。オーラのある人・一流の人に弟子入りし、教えを乞うことです。お遊びでない留学をすることです。

最後に、お子様たちが軸とコミュニケーション力を持っているかどうかを見極める方法があります。今、何を学んでいて、何が面白いのかをご両親に伝えることが出来るかどうか。訥弁ながら、「お父さん、お母さん、ここが面白いんだよ」と目を輝かせて、一生懸命分かるように説明出来るお子様なら、内定確実です。一度、試されてみては如何でしょうか。

（下：第一線で活躍する先輩たちなど外部講師を招いての「富丘会メッセージ」。春学期の15回の授業はいつも大教室いっぱいの方が熱心に聴講しました。講義と相談室での面談が両輪となって学生に熱いメッセージを伝えます。）



「本学のキャリア教育について」



大学教育総合センター
入学者選抜部・キャリア支援部講師 居郷至伸

本学は、新たな知の創造と活用に対応した教育を推進するため、各学部独自のキャリア教育に必要な支援を含めた入学から卒業までの段階に応じた全学的なサポート体制を構築し、キャリアデザインのためのツールや個別相談の充実に取り組んでいます。

全学的なサポート体制として大学教育総合センター内にキャリア支援部を設け、各学部選任の教員も構成員とするキャリア支援部会で学生のキャリア形成に関する課題の共有と検討を行い、学部の特性を踏まえた実践に反映させています。また、キャリアデザインのためのツールとして、日々の学生生活の定期的な確認や卒業後の進路選択に向けた設計・実行力を促進する「キャリアデザインファイル」を提供しています。このファイルを用いつつ、YNUの学生として何を学ばよいか、学んだことの意味を適宜振り返り、日々の活動に取り組むうえで有意義な各種講座や講演会を開催しています。

さらに、個別相談の機会として「キャリア相談週間」や、学務部が設置した「なんでも相談室」を通じて、学業・健康・進路・友人のことや日常生活のさまざまな事柄について、専門教員や心理カウンセラーが相談員として対応しています。私も専門教員として相談に応じていますが、来室する学生が抱える悩みや課題は一律ではないことを常と感じます。なかなか相談できず独りで抱え込んでしまっていたケースも見受けられます。しかし、たとえ思いつめたような表情で来室する方にも、相談後は前向きな気持ちで学業や就職活動に取り組めるよう、プライバシー保持の厳守に基づきながら、適切なアドバイスを行い、できうるかぎりのサポートに努めています。

ここに紹介しましたキャリア教育を継続・発展し、学生の入学から卒業までの学生生活全般におよぶサポートをより一層充実させるべく、今後もあゆみを進めていきますので、保護者のみなさまにおかれましては、益々のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

（下：新築された学生センターの建物3Fに移設しリニューアルされたキャリア・サポートルームはいつも学生でにぎわっています。ここには就職活動関連の豊富な情報が集約され、また常駐のスタッフが学生からの相談などを受け付けています。このキャリア・サポートルームと、教員組織からなるキャリア支援部会が主導して、就職セミナー、企業説明会、キャリアデザイン講座など年間を通して多くの活動が全学規模で行われています。また、学期ごとにキャリア相談週間も設けられています。）



「インターンシップ体験授業の成果報告」

経済学部経済システム学科 3年生 A君

インターンシップに参加するにあたり、その理由・目的については3つありました。

1つ目は、漫然と志望している金融業界の具体的な業務内容について知りたい、職場の空気を肌で感じたいという思いです。インターンシップは四季報や就活本、新聞等の紙面からでは収集できない実体験としての生の情報を収集するには絶好の機会であり、これが参加動機としては最も大きなものでした。2つ目は、意識改善の目的がありました。インターンシップという形で就職活動を始めることによって、働くことや社会に出ることに対してより早く意識を向けることができると期待しました。3つ目は、他大学からの参加者との交流を通じて就職活動を共に乗り越える仲間をつくるという目的もありました。インターンシップでは、学生同士のグループワークを実施する企業が多く、受け入れ大学も多様であるため、今後の就職活動を共に乗り越える仲間をつくるよききっかけになると思いました。以上の理由からインターンシップへの参加を決意し、「いちよし証券株式会社」、「三井住友海上火災保険会社」の2社のインターンシップに参加してきました。

いちよし証券では、初日から社長講話という形で貴重なお話をしていただきました。東証見学や日銀見学、支店訪問など社外へ出て見聞する機会もあり、目にみえにくい金融業界のイメージを掴む助けになりました。株式や債券、投資信託の基礎知識を座学で学び、それをストックリーグ・ファンドリーグで活かすなど、知識を実践に活用するまでの流れを通して経験できました。営業体験では話すことよりもお客様から情報を収集することがまず大事になってくるということを教えられ、売込み方が大事であると考えていた自分の認識がずれていたことに気が付かせて頂きました。

三井住友海上では、終始グループで課題に取り組むというインターンシップでした。たいへん優秀な学生が参加しており、学生同士のグループワークといえどもたいへん密度の濃い時間を過ごすことができました。私のグループには大学院生や帰国子女、留学経験がある人がおり、自分がその場にふさわしいのか当初戸惑いましたが、彼らに後れを取らないよう必死に課題に取り組みました。リスク管理についてアミューズメントパークのリスクを洗い出す課題、損害サポートについて交通事故の過失割合を判断する課題など損害保険の仕事を疑似体験することにより、損害保険会社の具体的な業務内容を知ることができました。グループの仲間とはよい関係を築け、今でも就職活動の情報交換や純粋な悩み相談などをメールや飲み会等でできるようになりました。彼らとは日々よい刺激を与え合える仲間であり、インターンシップで得たいちばんの財産であると思えます。

(A君は現在就職活動中であるため一応匿名としました。)

発展途上国財務省若手幹部育成の大学院プログラムの刺激を学部学生に還元する

経済学部教授 山崎圭一

本経済学部(本学大学院経済系)では、世界銀行とパートナーシップ契約を結んで、1996年から発展途上国の財務省とくに租税当局を中心とした若手幹部候補生を対象とする修士課程を運営してきました。各国の優秀な社会人院生を相手に、すべての授業、修士論文指導、フィールド・トリップ(研修旅行)、日常生活支援を英語で実施してきました。このような、世界銀行と契約した上での特別な修士課程(MPE)を受け付けているのは、米国のコロンビア大学、ハーバード大学、日本の慶応大学、筑波大学、GRIPS(政策研究大学院)など、全世界でも数大学に限られています。

経済学部には「留学生交流ラウンジ」があり、パーティーなどを通じて、学部英語講義や欧州英語討論会に参加した学部学生とMPE留学生との間で積極的な交流が行われています。このような交流の場を通じて、大学院での教育イノベーションの成果や刺激を学部生に還元したいと考えています。

学生を「国際化」させる努力の効果も出始めており、英語での就職説明会で、ワシントンからきた講師に次々と英語で質問をあげせる状況を先日(11月20日)に経験しました。これは米州開発銀行(IDB: Interamerican Development Bank)への就職やサマー・インターンシップの機会を説明する会で、米州開発銀行のワシントン本部から担当者2人が来校されて、英語で約2時間の説明をされました。5~6年前ですと、私たち教授が若干日本語で補足し、また「Q&Aは日本語でもよろしい。教授が通訳します」といわないと、発言者がいないという状況でしたが、今回は私の通訳は不要で、学生と講師の間で自由な英語での質疑応答が展開していました。質問内容は鋭利で、講師である開銀本部人事担当者も「過去の日本人学生のイメージと違う」という感想を述べておられました(注:米州開発銀行は、世界銀行の姉妹機関の1つで、日本も出資者であるため、日本人の職員・幹部も求められている)。

学部教育の課題としては、むろん国際化、英語力の向上だけではありません。大手企業の人事部に勤める知人と話していると、「最近の若い社員はお酒を飲まないし、飲み会に来ない。大事な顧客との接待でカシス・ソーダを頼むから、慌てた」と嘆いておられました。「若手社員の間での新型鬱(うつ)の増加に悩んでいる」とも聞きました。ビジネス界が大学に期待している教育は、経済学や英語力だけではなく、総合的な人間力のようなものだ、個人的には感じています。学校教育法の第83条第1項に、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道德的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とあります。「道德的及び応用的能力」とある部分が、おそらく経済学や外国語以外の、総合的な人間力を意味するのかなと、思います。

(左下:米州開発銀行就職セミナーの掲示用案内。)

(右下:2012年11月20日の米州開発銀行就職セミナーの様子。)



YNU 経済学部 教育後援会

特集

経済学部のキャリア教育



YNU 経済学部教育後援会事務局

〒240-8501
横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-3
横浜国立大学経済学部
新研究棟 2F 研究支援室

電話: 045-339-3515
<http://www.econ.ynu.ac.jp/campus/support/ynu/index.html>

発行 / 2013年12月